滋賀県COVID-19 災害コントロールセンター通信

令和5年9月30日
No. 1241

滋賀県 COVID-19 災害コントロールセンター 災害医療コーディネーター

本日のコラムは別紙のとおりとなります。

● **入院状況**（圏域・五十音順）　2023/9/30(土)

医療機関名	病床数	入院数	空床数
大津赤十字病院	6	4	2
大津赤十字志賀病院	4	0	4
滋賀医科大学医学部附属病院	6	0	6
滋賀里病院	1	0	1
市立大津市民病院	20	11	9
JCHO滋賀病院	10	5	5
瀬田川病院	4	0	4
ひかり病院	6	0	6
琵琶湖病院	2	0	2
琵琶湖大橋病院	8	8	0
琵琶湖養育院病院	20	0	20
淡海医療センター	8	8	0
近江草津徳洲会病院	0	0	0
湖南病院	1	0	1
済生会滋賀県病院	8	4	4
済生会守山市民病院	0	0	0
滋賀県立小児保健医療センター	9	1	8
滋賀県立精神医療センター	2	0	2
滋賀県立総合病院	14	2	12
市立野洲病院	8	6	2
南草津病院	1	0	1
甲賀市立信楽中央病院	6	2	4
甲南病院	5	0	5
公立甲賀病院	12	5	7
紫香楽病院	1	0	1
水口病院	6	0	6
青葉病院	4	1	3
ヴォーリズ記念病院	4	2	2
近江温泉病院	3	0	3
近江八幡市立総合医療センター	12	7	5

医療機関名	病床数	入院数	空床数
湖東記念病院	4	4	0
滋賀八幡病院	2	0	2
東近江敬愛病院	6	3	3
東近江市立能登川病院	4	0	4
東近江総合医療センター	10	3	7
日野記念病院	2	2	0
豊郷病院	9	8	1
彦根市立病院	12	11	1
J's女性救命クリニック	0	0	0
市立長浜病院	6	3	3
セフィロト病院	4	0	4
長浜市立湖北病院	0	0	0
長浜赤十字病院	14	1	13
今津病院	2	0	2
高島市民病院	15	6	9
マキノ病院	3	1	2

※県の病床確保計画に位置付けられた、要請があれば患者を受け入れる確保病床の内、現フェーズにおける病床数

		病床数	入院数	空床数	病床使用率
計	現在運用病床数	284	108	176	38.0%
	最大確保病床数	446	108	338	24.2%

●宿泊施設入所者

ピアザびわ湖	0
ヴォーリズ(宿泊療養)	0
宿泊療養　計	0

発行者：滋賀県COVID-19災害コントロールセンター
ＴＥＬ：077-528-1330
ｱﾄﾞﾚｽ：coronataisaku3@pref.shiga.lg.jp

滋賀県COVID-19災害コントロールセンター通信　No.1241　　別紙

滋賀県COVID-19災害コントロールセンター長　　角野　文彦

平素より大変お世話になっております。滋賀県健康医療福祉部理事で滋賀県COVID-19災害コントロールセンター長の角野でございます。令和2年4月にコントロールセンターを立ち上げ、同年４月17日から始まりNo.1241まで続いているこの通信ですが、コントロールセンターの運営終了に伴い本日分が最終号ということで、初めて筆をとらせていただくことになりました。

まず、私の方からこの場をお借りしてお伝えしたいことは、この 3 年半もの長期間に渡ってコントロールセンターを支えていただいた皆様への深い感謝の気持ちです。調整業務に従事いただいた災害医療コーディネーターや介護コーディネーター、コロナ患者の受入医療機関、小児・周産期・透析等リエゾンの先生方、初期から患者搬送に協力いただいた消防機関、保健所など、挙げ出したら際限がないですが、非常に多くの方々の支えと御尽力により未曽有の危機に直面してもなお困難を乗り越え、多くの県民の命を救うことができたと考えております。本当にありがとうございました。

そして、現在、コロナ禍での経験を踏まえ、新たな感染症等から県民の命、健康を守るため、医療や介護等の現場で御奮闘いただいている皆様のお声をお聞かせていただきながら「感染症予防計画」の改定に向け鋭意取組んでいるところです。その中でも、特に重要になるのは平時からの「備え」、とコロナ禍で痛感したことから、医療機関等とあらかじめ協定を締結し、有事の際に速やかに対応できるよう、関係の皆様と協議を重ねているところです。このような新興感染症はいつか必ず起こりますが、発生した際にはコロナでの経験を活かした体制へ迅速に移行できるようお力添えください。

コロナに関しては類型移行後、行政の関与は縮小する方向で進められていますが、ウイルスそのものがなくなったわけではありません。特に医療現場等で働く皆様にはこれからも御対応いただくことになるかと思いますが、引き続き御協力を賜りますようよろしくお願いいたします。我々といたしましても、今後ともできる限りのサポートをさせていただきたいと考えております。

末筆ながら、皆様の益々の御活躍を心よりお祈りいたします。

医療統括長　　松原　峰生

コントロール通信最終号として、一言ご挨拶申し上げます。この3年半、本当

にみなさん、ありがとうございました。皆さんのご協力の元、何度かきた感染の波を乗り切ってきました。本当に感謝しています。皆さんのご要望、ご意見を十分に反映できませんでした。いろいろ無理も言いました。最終的に皆さんのご協力でなんとかゴールまでたどり着いたと感じています。しかし個人的には、この経験を生かして次に備えたい、、、とは、一切思っていません。もうこんな経験は二度としたくありません。このような感染症がまた大流行したり、今回のような社会的危機が、来ないことをひたすら祈っています。将来は、神主か坊さんにでもなって何がおきても安全安心なところから『祈ってます』とか『頑張ってください』とか言い続ける立場になりたいものです。

医療コーディネーター　　竹市　康裕

　この9月30日にて、2020年4月より続いた滋賀県COVID-19災害コントロールセンターは閉鎖いたします。コロナ対策に携わっていただいたすべての方に感謝いたします。

　日本の都道府県の中でも早い時期に滋賀県ではこのコントロールセンターは立ち上がりました。発足当初から様々な批判にさらされました。終えるにあたり、やり遂げた安堵感以上に、批判に応えられなかった悔しさが残っています。しかし、どんな批判を受けても、このコントロールセンター無くして滋賀のコロナ診療はできなかったことは事実です。患者を中心にして、病院と県、保健所、消防と間に立ち、コロナ診療を実際している現場の医療職が聞き取りやトリアージ、搬送調整をして、マニュアルなど仕組みを構築していきました。それにより、救急医療の崩壊をギリギリのところで防ぐことができました。深夜に何度も各病院に電話をして連日のように夜を明かし、そのまま救急の仕事をこなしていた時期も今では懐かしく思います。ただ、自分の勤務する病院を空けなければならず、この間に挟まれたストレスも無視できませんでした。一緒に働いたスタッフの中には離職したりしたものもいました。その原因として、コントロールセンター業務におけるストレスがあったことも事実でしょう。歴史的なパンデミックを経験し、これをレガシーとして、次の時代につなぐ新たなステージに医療と行政が進化すると信じています。

医療コーディネーター　　中村　誠昌

新型コロナウイルス vs 人間、勝者は？

　今日でコントロールセンターが終了となり、新型コロナウイルスとの“戦い”

が大きな節目を迎えました。長かったような、あっという間だったような時間でした。

ところで、この“戦い”の勝者はどちらなのでしょうか？ウイルスにとっては自分の仲間をできるだけ増やし続けることが勝利目標です。一方ウイルスは人間のエネルギーを利用して増えるので、人間にとっては感染しないことが最良ですが最低限嫌な症状が出なければ許容可能です。そう考えると新型コロナウイルスはα株からスタートし形を変えながら今なお子孫を増やし続けていますが、人間の方は死亡することは少なくなったものの今なお感染により何らかの症状がみられます。まだコロナウイルスの方が勝っている感じですね。

人間は長い歴史をもつ地球の生き物の中ではかなり新参者であり、人間に悪影響を与える感染症の多くが他の動物からうつったものです。インフルエンザは元々トリの感染症で、天然痘はウシ、チフスはネズミ、といった感じです。微生物は動物から人間に感染するようになり、人間が全員死んでしまわない程度の意地悪をしながら子孫を増やすようになるのです。今回の新型コロナウイルスも他の病原体と同様に時間をかけながら人間と共生していくのだと思います。

それではこのウイルスに人間は完敗だったのでしょうか。生物学的には前述したようにウイルスの勝ちだと思いますし、コロナウイルスを完全にやっつけるような治療法を確立することは出来ませんでした。更に莫大な費用と労力をかけたにも関わらず、医療崩壊と言われる状況にも追い詰められました。やはり完敗みたいですが、それでも私たちの社会は変わった（変われた？）気がします。不要不急なものを止めたことから、慣習的に行っていたことが本当に必要なのか考え、あるいはできるだけ効率的に行おうとする気持ちが生まれました。教育分野などでは IT 化が急速に進み、学習風景も大きく変わりました。ある意味未来が一気にきたような気持ちです。

この感染禍で多くのものを失い、多少の得ることがあったと思います。残念ながら人間は忘れやすい生き物です。今回全世界が経験したことを次の世代にまで引き継げるようにしていくことが、私たちの役割なのだと思います。何も学ばなければ、次の新興感染症爆発でも同じ事を繰り返すだけです。

医療コーディネーター　　塩見　直人

未知のウイルスとして COVID-19 の対応が始まった 2020 年春、滋賀県はこの感染症の蔓延を災害としてとらえ、早期にコントロールセンターを立ち上げました。当初は松原先生を中心に、竹市先生、中村先生が患者の入院調整を開始し、その後、私にも声がかかりました。2020 年 5 月 2 日、先の 3 人に加え、立川先生、田畑先生、私の 6 人で、県庁においてコントロールセンターの運営方針につ

いて話し合ったことを思い出します。それから約3年半が経過しました。
　この間、何度も危機的な状況がありましたが、関係者の知恵と工夫で危機を乗り越えてきました。とくに2021年7月、第5波を迎える前、施設内で診療が可能な宿泊療養施設を設置したことは画期的な対応でした。これにより滋賀県は病床使用率が 90%を超えても、医療崩壊を回避できました。この時期、患者調整では多くの方々に負担をおかけし、心苦しいこともありましたが、何とか協力いただき調整できました。
　滋賀県は、県庁、保健所、病院、消防、民間の各団体と協力して、この未曽有の災害に立ち向かってきました。その中心的役割であったコントロールセンターは閉鎖となりますが、患者調整に関して10月からあらたな体制でスタートします。滋賀医大としては、県の最後の砦として、各地域で調整が困難な患者に対応していきたいと考えています。
　これまでのコントロールセンターの活動を振り返り、微力ながら活動に参画できたことを誇りに思っています。お世話になりました多くの皆様に感謝申し上げます。

医療コーディネーター　　千葉　玲哉
　3年間、お疲れ様でした。この原稿を読んでいる人、読んでない人、日本に住むすべての人々、皆で支え合い励まし合って未曾有の災害と戦えたこと、誇りに思います。
　36歳が39歳になりました。変わったような変わってないような。僕が生きている間にこれ以上の感染症は出てこないと祈りながら筆を置きたいと思います。本当にありがとうございました。

医療コーディネーター　　越後　整
　まず、滋賀県COVID-19災害コントロールセンターに携わった全ての方々への深い感謝の意を表明いたします。皆様の協力と結束の力がなければ、この 3 年間を乗り越えることは難しかったでしょう。
　コントロールセンターの業務を通じて、様々な背景を持つ方々とのコミュニケーションが増えました。中には厳しい意見や要望を伝える方もおり、そのたびに私たちの精神的な強さが試される瞬間がありました。その中で感じたプレッシャーに、時折声に出して感情を発散することもあったことを懺悔いたします。デルタ株の流行時には、その猛威に対する不安感が強く、治療に関わる中での自

らの感染リスクへの恐れもありました。その中での患者様の容態の変化も心に深く残っております。
　オミクロン株の時期には、政府の様々な情報や方針の変更に振り回される日々が続きました。結果的に、集団免疫の形成が求められたと感じております。この期間中、日本の社会が直面した様々な課題や、人々の間での摩擦も目の当たりにしました。
　私たち日本人が大切にしてきた相手を尊重し、思いやりを持つ文化を再確認し、アフターコロナの新しい時代に向けてより良い社会を築いていく必要があると感じております。
　最後に、この 3 年間における多くの方々の献身的な活動は、私たちの歴史に刻まれる貴重なものとなるでしょう。その貢献を心から尊敬し、感謝の気持ちを忘れることなく前に進んで参りたいと思います。

医療コーディネーター　　岡林　旅人
　コントロールセンターに携わってこられた皆様本当にお疲れさまでした。
　私は、前任者渡邊先生の後任として、システムの出来上がっている中での担当でしたので、調整に難渋したケースはまずありませんでした。コントロールセンター立ち上げから、デルタ株や重症者も多く、多数のコロナ患者の調整に尽力された皆様本当に大変であったことを聞いています。改めて感謝申し上げます。現在、甲賀病院でも職員も含めて散発的にコロナ陽性患者はでていますが、ほぼ軽症者であり医療資源の大掛かりな投入は不要な状況です。
　これからも covid-19 の発症患者は続くでしょうが、特別な疾患ではなくなってきていますので、普段の診療で配慮しながら対応してゆけばよいと考えます。
　covid-19 に関わり尽力された皆様「ありがとうございました」そして「お疲れさまでした」

医療コーディネーター　　山口　琢
　本日 9 月 30 日をもって滋賀県コントロールセンターが終了となります。昼夜問わずご対応して頂いた関係者の皆さま、お疲れ様でした。県内のコロナ業務がスムーズに回ったのも、コントロールのおかげだと思います。本当にありがとうございました。個人的にも、コロナ診療に関わり沢山の経験をさせて頂きました。まだこのウイルスとの戦いは続きますし、やがて別の新興感染症も登場すると思います。まだ課題はありますが、今回の経験を活かして今後も皆さまと連携をとっていきたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。